学者の酒・文人の酒

木村彰一・寺田透両先生と酒

沓掛良彦

死後の名は
死後の名はともにあるべし
一盞の酒にもしかず
わが師かくのらしたまひぬ
われは師の言にしたがふ

三好達治「村酒雑詠」より

酒を飲み始めて以来約四十年、想い起こせば、これまで随分さまざまな人とさまざまな場で酒を酌んできた。盃を銜みつつ人を思うと、学生時代に共に散々安酒を酌み交わした仲で、無二の親友であり酒友である田中弥千男をはじめ(露文科での同級生だが筆者が兄事しているこの男は、われわれ夫婦の仲人まで務めてくれた)、酒の上での付き合いのあった人々が、その酒癖、酒風とともに脳裡に浮かんでくる。中でも懐かしく想い起こされるのは、今は泉下の人となられた二人の恩師木村彰一、寺田透両先生との酒である。お二人とも駒場の大学院で学んでいた頃、わたくしの修士課程、博士課程での指導教官をお願いした先生であり、文字通り生涯の恩師である。共に盛んにお酒を飲まれたそのお二人の先生と酌んだ酒を思うと、時に胸迫り、声を放って泣きたくなるほど懐かしさに駆られることがある。

言語学者、スラヴ学者として高名であった木村彰一先生は、学問のみならず、わたくしの酒の師でもあられた。とは言うものの、わたくしは学問の方でも、酒道においても、まったくの不肖の弟子であって、いずれの方面においても先生のお名前を穢す存在でしかない。傑出した学者の御指導をうけながら、狂詩戯文のたぐいばかりに気を取られ、学問の方で大成しなかったのは、これはもう持って生まれた才の乏しさと懶惰の性ゆえ、致し方ない。しかし今もって口惜しく思うのは、ついに先生から「酒品」を学び得なかったことである。尤も、酒品などというものはそう簡単に身につくものではなく、酒を飲む当人の育ちの良さとか、生来の品性と相俟って身辺に漂うものだろうから、そもそもさようなものを身につけようというのが、無理な話だったかもしれない。

わたくしが大学院に「入院」した年、木村先生は心臓を患って入院しておられた。大学へ出て来られたのは秋学期からではなかったかと思う。木村先生のことは早大での恩師であられた横田瑞穂先生から伺ってはいたが、お目にかかるのは初めてであった。先生が大学に来られたらしいというので、第八本館と呼ばれていた研究棟の一階にあった先生の研究室をおそるおそるノックすると、「はい、どうぞ。」というバスの声が聞こえ、扉を開けて入ると、先生は机に向かって坐っておられた。がっしりと厚い胸、品の良いおだやかな笑顔、いかにも学者らしいが決して堅苦しくはないその温容に接して、一度に緊張が解けたことを思い出す。東大は定年が六十歳と聞いているから、考えてみれば先生は

まだ五十代前半であられたはずだが、老教授とは言わぬまでも、現在もはや還暦に近いわたくしなどに比べても、はるかに落ち着いた雰囲気と気品をたたえておられ、「大先生」という言葉がぴったりであった。「ようやく師に出逢った。」というのがその時の実感であった。先生との酒のおつきあいが始まったのは、その日からである。

爾来どれほど先生の研究室へお邪魔し、学内学外でどれほどお酒を御馳走になったことだろう。一体に、ロシア語やロシア文学を専攻している学者や翻訳家には、大酒飲みが多い。飲むものもウォトカなどいう、なかなかいけるがきつい酒ばかりである。スラヴ学の第一人者としてとして高名なわが師もまた、また酒客としても聞こえが高く、その名を慕って、先生の研究室には学問と酒道とに志す者たちが、蝟集したのである。先生の弟子としては末輩のわたくしもまたそこで鍛えられたのだが、惜しむらくは材質が悪く、鍛え甲斐がなかったのである。「学問はね、酒で磨かないと光が出てこないですからね。」と師は喝破せられた。事実、先生は孜々として学問に精励され、また大いに飲んで学問に磨きをかけられ、詩酒合一ならぬ「学酒合一」を成し遂げられた。教会スラヴ語文法をはじめ、スラヴ学におけるその御研究が光を放っていることは、周知のところである。学問に志したつもりのわたくしも、先生の研究室に参じて、いずれ学問を輝かせるべく大いに飲んだのであるが、不肖の弟子は一時酒量こそ上がったものの、歳とともに髪が薄くなり、光ってくるのはアタマの方ばかりで、肝心の学問の方はちっとも光が出てこないのは情けない。

それはともあれ、木村先生のお酒は豪放であり、しかも品位を保ったよい酒であった。周知のごとく、現在は「シンポジウム」などとしゃらくさい名前で呼ばれ、出席者が真面目くさってあれこれ議論することになっている集まりは、古代ギリシアでは「シュンポシオン」と言い、つまりは「共に飲むこと」、「酒宴」そのものであった。そのかみ、毎週のように駒場の木村研究室でおこなわれていたのがまさにそれであった。何曜日のことであったか、しかとは思い出せないが、講義が終わった後の先生の余談が楽しみで、立ち去りがたいままにわれわれ学生が先生の研究室で話しこんでいると、シュンポシオンが始まるのであった。夕方になると、当時ロシア語の助手であったH氏（現在北大文学部長）、先生の高弟であるS助教授（現在東大名誉教授、酒で磨いた甲斐あって、その学問ばかりかアタマも光りを放っているが）、白晰の美青年で、語学の天才、秀才としてその名も高かった助手のM氏（後東大教授、この男も数年前に死んでしまった）、いかにも若々しいK助教授（現在東大名誉教授）をはじめ、みんながぞろぞろと集まってくる。そこでソクラテスならぬ木村先生を囲んでのにぎやかなシュンポシオンが始まるのであった。夜遅くまで続くことの多かったこのシュンポシオンは、多くは男だけの酒宴であったが、時に青竹を割ったようなさっぱりとした気性で、女性ながらいつも豪快な飲みっぷりを見せてくれた比較文学の助手のS女史（武蔵大学前文学部長）などが加わって、酒宴に花を添えることもあった。（なかなかの美人だったのである。）むろん、シュンポシオンの主役はいつも先生であって、先生はビールを水代わりになさりつつ、ウォトカなどをぐいぐいと豪快に、しかし静かに召し上がりつつ、弟子や学生たちとの談笑を楽しんでおら

れた。酒豪として聞こえた先生も、晩年はさすがに酒量やや衰え、お酒を飲んで多少乱れることもあったようだが、駒場の研究室での先生は、その温顔に笑みを絶やさず、飲んでも少しも乱れるということはなかった。まさに酒品というにふさわしい品位ある酒を酌み、陶々として心から酒宴を楽しんでおられた。その傍らにいるとなんだかほっとし、しみじみと酒というものの良さを感じるのであった。いくら杯を重ねても、その品位を失われなかったのは、さすがである。不肖の弟子が、この齢にしてなお酒品を学び得ないのが恥ずかしい。

ところで木村先生の酒風だが、これはその魅力あるお話と切り離しては考えられない。先生はおよそ多弁というような方ではなく、あのぶ厚い胸から発せられる魅力的な深い声で、言葉を選んでいつも静かに話をされたが、飲むにつれ酔うにつれ、話題豊富なお話はますます生彩を加えるのであった。なにぶん、学は東西に遍く、識は古今に通じておられ、ユマニストの名を冠するにふさわしい博大な学識の持ち主であられたから、話題はおそろしく豊富で、多岐にわたるものであった。ときにはかなり辛口の人物月旦をなさることもあったが、酒席の話題も多くは学問、芸術を離れることなく、生臭い話や俗事にわたることは稀であった。それゆえに、先生のお話を伺うのを楽しみに、その学風と酒風を慕って、先生のもとに弟子や学生が蝟集したのである。

往事芒々、三十年も昔のことゆえ、どんなお話を伺ったかはいちいち正確には覚えてはいないが、東大の学生時代の思い出や、御幼少の頃、厳父木村謹二博士が勤務しておられた金沢で室生犀星に出会ったこと、北大在任中の武田泰淳氏や高橋義孝氏との交遊、戦後ハーヴァード大学に留学された時代の思い出、ポーランド留学中のことなどを、懐かしげに、かつ楽しげに幾度か話されたことなどが、あざやかに記憶に残っている。稀にではあるが軍隊時代のことも口にされ、「東大を出ているというので、ずいぶん殴られたんです。」などと淡々と話されたこともあった。一度なぞは先生と対酌していて、奥様と結ばれるに到ったロマンスを伺ったこともある。

秋田の名家のお生まれで、木村謹二博士の御長男であられた先生は、その育ちの良さを感じさせる品位の人であられ、いくら盃を重ねても放歌高吟はむろんのこと、大声を出されたりすることもなく、静かに、おだやかに酒を酌み、学問や文学を語って、「学酒合一」のみごとな境地を示されたのである。仮に大酔なさっても、下がかった話などは決してなさることはなく、艶っぽい話題などもまず出ることはなかった。それがある時沈酔なさり、めずらしくわれわれ学生どもに「あなたがたはまだ若いから知らないだろうが、そもそも女性というものはね、」などと独自の女性論を展開されたことがあった。その時は神妙な面持ちで聴いていた友人のM君（現在大阪大学文芸学・美学教授）に翌日大学で逢うと、「木村先生が経験豊富であるかのように、女性のことでわれわれに何か教えようってのは、論理的に変だよ。学問の方面でなら当然だけどね。だって、先生は奥さんしか知らないじゃないか。」と口を尖らせて言う。このM君（この男はわたくしのギリシア語の師でもある。その学識に敬意を表して、われわれは勝手に「M博士」と呼んでいた）は、とにかく論理が好きで、大先生のお説たりとも論理が通らないと、簡単には承服しないのであ

る。そこで、その旨を先生に申し上げると、先生は苦笑いを浮かべ、悔しそうに「うーむ、おめえさんたちゃ知らねえな。」とおっしゃったのは、今思い出してもおかしい。

それはともあれ、木村先生を囲んでの大学での酒宴は、どちらかと言えば暗いことの多かったわたくしの二十代における、最も楽しい思い出となっている。ありがたくもまたおかしい思い出もある。わが師は、「忘憂の物」としての酒の効用を信じておられ、「以酒養真」ならぬ「以酒養学」の気概を弟子や学生たちに伝えようと腐心なさっていたのだが、ある時途方もない無茶を仰せられたことがある。漱石先生ではないが、わたくしは生来胃弱で、小学生の時から胃薬を呑んでいて物笑いになったほどである。二十代にもしばしば胃潰瘍や胃炎を繰り返し、ある年の正月、帰省中に胃潰瘍で胃から血を吐き、入院を命じられたことがあった。大の医者嫌いゆえにそれを拒み、酒も断って家でおかゆなど食べておとなしくしていた後、休み明けに蒼い顔をして先生の研究室に顔を出した。「実は胃潰瘍で血を吐きまして・・・」とぼそぼそ言いかけると、先生は破顔一笑、「なあにそりゃストレスですよ。酒を飲めば治るね。今日つきあいますか?」とおっしゃる。仰天したが、この晩おそるおそる渋谷の寿司屋にお供し、大いにお酒を御馳走になった。すると不思議や、翌日から胃も痛まず、仰せのとおり胃潰瘍はケロリと治ってしまったのである。師の言たるや実に偉大である。「わが師かくのらしたまひぬ。われは師の言にしたがふ」を実行したのは、正しかったのである。(尤も、その後も幾度か胃を病み、いっそこんな面倒臭いものは切除したらさっぱりするだろうと思うことしきりである。)

木村先生との酒で思い出すことはまだまだある。大学院を出て大阪で大学の教師となってからも、さらに東北大学に移った後も、先生の温容に接して酌み交わしたく、上京するたびに酒を携えて研究室をお訪ねし、あちこちで銘酒を御馳走になったものである。(但し、日本酒よりもむしろウォトカ、ブランデー、ウィスキーなどの強い酒を好まれた。)これは先生が柏下の人となられる日まで続き、酒を介しての師弟の交わりは約二十年に及んだ。残念ながら、酒品においては言わずもがな、還暦を過ぎてなお衰えを知らなかった酒量においても、不肖の弟子はついに最後まで先生の足下にも及ばなかった。そもそも体の作りからして違うのである。わが師の酒豪ぶりはいまだに語り草になっているほどだが、ロシア人なみのがっしりした体格で、食べる方ももりもりと召し上がり、ウォトカなどもすいすいと豪快に、しかし実に品よく飲まれた。ある時、一年先輩で今は北大のフランス語の教授になっている男が(彼もきゃしゃな体つきに似合わぬ酒豪だったが)先生の豪飲ぶりを見て、「ありゃロシアの熊だね。とてもかなわねえな。」と洩らしたが、実際そのとおりであった。見慣れていたはずなのに、わたくしも先生のお酒の強さに改めて一驚したことがある。大阪の大学で教師をしていた頃、先輩で同僚のK氏(現在奈良女子大教授、彼も木村門下で、つまりはわたくしの兄弟子にあたるが)と先生とわたくしとで、京都のロシア料理店で会食したことがあった。その折先生はウォトカを二本飲まれ、「うまいですね。もう一本いきますか。」とおっしゃったので、あわてて「ま、先生今晩はこれくらいで。」とお止めしたが、それは翌日御一緒に比叡山に登って、また飲むことになっていたか

らである。しかし先生は物足りないらしく、結局その店でウォトカを一本お買いになり、ついでにピロシキも買われてホテルにお帰りになった。翌日比叡の山へ向かう途中で、「あれね、あれからホテルへ帰ってピロシキを食いながら飲んじゃいましたよ。」とおっしゃったのには、さすがに驚いた。こちらは二日酔いで頭がぐらぐらしていたところだったので、先生の底知れぬ強さを知って、溜め息が出た。無論その日は比叡山に登り、頂上に近い料理屋で「僧兵鍋」なるものをつつきながら、今度は日本酒を盛大に飲んだが、先生は泰然自若、悠揚せまらざる態度で酒楽を味わっておられた。こちらは宿酔を解くべく解酲杯を口にしながら、先生の器の大きさにただただ感じ入るばかりであった。また別の折であったと思うが、先生はわざわざ来阪なさり、まだ新婚間もなかったわが家にお泊まりくださったことがある。その晩、家人の手料理で酒を酌み交わしたのだが、先生は家人に向かい、「奥さんもこんな神経質な男を亭主に持って、大変でしょう。面倒でしょうがよろしく頼みますよ。」と、まるで父親のようなことをおっしゃった。先生がこまやかな気配りの人であることは、接した誰しもが知るところだが、その折わたくしは先生に実の親父以上の親父を感じたものである。その、翌日K氏と三人で春ならぬ晩秋の吉野山に登って、ごく稀ながら美しく紅葉した木々を眺めながら一壷を傾けたのは、懐かしい思い出となっている。

わが師木村先生との酒を語ればきりがない。言うまでもないことだが、わたくしが先生に学んだのはまずはロシア文学、スラヴ学であって、酒ばかり御馳走になっていたわけではない。にもかかわらず、申し訳ないことに、わたくしはその方面の勉強を「廃業」してしまった。しかし考えてみると、これも先生のせい、あるいは先生のおかげである。「ヨーロッパ文化はね、要するにラテンですよ。ラテン語を知らないとヨーロッパはわからないね。」、と元来は古典語学者であられ、ヨーロッパの言語・文学に精通しておられた先生はよく力説された。「われは師の言にしたがふ」というわけで、わたくしも必死でギリシア・ラテン語を独学し、少し読めるようになると、友人「M博士」を師としてさらに学んだ。その結果、ついにはロシア文学を放擲し、そちらの方面へ行ってしまったのだが、「どうも、あの男には薬が効き過ぎたようだね。」と先生が苦笑しておられたと、後にさる人から聞いた。スラヴ研究で先生の学統継ぐ俊才はあまたいるから、心配はないのだが。

「酒は是れ古の明鏡」と漢土の詩人孟郊は言い、「酒はこれ人間の心を映す鏡」とアルアルカイオスも言っている。木村先生の場合は、その酒風は学風を映して深く、広かった。「たぐいなきことばの師にして酒道の大宗匠なるわが師に捧ぐ」

これは二十年ほど前、わたくしが初めて拙い訳詩集を出した折に、そこに刷り込んだ献辞である。わたくしも齢還暦に迫り、お迎えの近きを感じるようになってきた。「酒は到らず劉令墳上の土」、来世を信じないわたくしは、死後あの世でまた先生と酌み交わすことを望み得ない。先生との酒を思って供養の酒を酌み、学に志す大学院の学生たちに常々「学酒合一」を説き、わが研究室をシュンポシオンの場とすることで、その学恩、酒恩に報いようと努めるのみである。